森の幼稚園（二）

SKK生

三、園藝主任

私ですか。私自身のことなどは申上げる必要もないことです。然し私がこゝの職員の一人であると云ふことは、この幼稚園の一の特色をお話するのに、都合のよいことであるかも知れません。

先生が幼稚園の幼稚園たることに深い意味を認めて居らるゝことは前に申しました。然し幼稚園の園たるべきことは、さう云ふ根本的な意味に於いてのみあるのではありません。森の幼稚園は實際に於いて一の大きな園なのであります。

先生は人間、わけても子供の性情の上に及ぼす自然の感化に就いて、恐らく何人よりも最も強き確信を有して居られます。殊に智的とか、美的とか乃至道德的とか云ふやうに、教育の區劃が未だ分れて居ない幼兒教育にあつては、第一が保育者の人格的感化、それに次いでは、自然の感化が重要であることを深く信じて居られるのです。吾々の頭から出る教訓の言葉、吾々の手で造る保育材料は、子供の心に對して多少偏した作用をするものであるを免れません。智育的効力には富んで居るが、美育的たるには缺けて居るとか、美育的には精巧なものであるが、德育的効果には乏しいとか、どうしても、さういふ風になり易いものです。此の點に於いて、自然物程、幼兒の全心性に圓滿な効果を與ふるものはないと云ふのが、先生の確信であります。

何時の日でも來て御覽なさい。此の幼稚園には、四季の草花の絶えたことはありません。後の丘に

は小さいながら、いろ〳〵の果樹園も設けてあります。畠には其の時々の野菜が作つてあります。其の外兎も居れば鶏も居て、風あたりの少い處を選んでは、これ等の家畜小屋、鳥小屋が幾つも建てられてあります。かういふ風で、廣さからいつても、設備からいつても、この幼稚園の主要部分は保育室よりも遊園であることは、一度來て見た方にはすぐに分ります。私のやうな園藝家が、幼稚園の職員であるといふことも、こゝでは、いはゞ當然の必要であるのです。

私は勿論、直接、幼兒を保育する役ではありません。然し幼兒教育に斯くも大切なる自然物の世話をして居るといふことは、つまり間接に幼兒を保育して居るといふことになりませう。ものゝ後に居て、隠れた善をするといふことは、心に愉快なことであります。まして、この大きな自然の後に居つて、かういふ仕事をして居るといふことは、私には胸の踊る程愉快なことであります。

或る時のことでした。某縣の教育家が參觀に來られました。その時先生は丁度私といつしよに泥だらけになつて畑におりて居ましたが、そのまゝ花壇や、森や、鶏小屋などを案内して、保育室へは案内しなかつたことがありました。その教育家も別に保育室を見せて呉れともいはず、丁度畑で芋掘りをして居た幼兒達を見て、大層滿足して居られました。

その折に私を紹介された先生の言葉が奇拔でした。

「花田君は、ガーデン主義の具體的の方面の主任をお頼みしてあります」

四、笑がほの人

春野さんは初めてこゝへお出の時分には、隨分しかつめらしい顔をしてお居でゝした。前からのいろ〳〵のお身の上を承はつて見れば、並大抵

のお不幸ではない。良人には、永い看護の効もなく先き立たれて、その後は幼い忘れがたみを若い女の身一つに育てなければならぬ頼りない境涯の人になられた。あゝとか斯うとかいふ、其の人々から言へば親切な申出も世話も少からずあつたそうである。併し春野さんには、どこ迄も其のお子さんの一人の母で通さうといふ決心が堅かつた。その爲に、拒まれた親切は不親切に變る世の人情から春野さんは愈々障碍の多い境涯になられて、自然と若々しい頰の色も褪せた。冴やかな聲もかすれた、打ち開けた胸も閉ぢ勝ちで、陰氣な、しめつぽい氣分になつた。——先生が春野さんを如何にも氣の毒に思つて、こゝへ招かれたのは丁度さういふ時であつたのでした。何となくしかつめらしい、年齢に似合はない不快活な容子が顏色や擧動に見えたのも、まこと無理のないことであつたのでした。しかしそれが一月たち二月たち、次第に春野さんの顏が解けて來ました。段々快活な氣分に變つて來ました。一同深い同情を以て迎へた私達は、春野さんの此の變化を何より喜ばしいことに一同で思ふ樣になりました。

そこで先生は、春野さんに更めて幼兒の一と組を渡されました。元來春野さんの學歴から云つても、技倆から言つても、充分一と組の幼兒を受持つ力のある方なのです。しかし「笑がほの人でなければ幼兒の友にはなれぬ」といふ先生の日頃の主張から、此の悲哀の人に、そのまゝ直ぐに幼兒を託されなかつたのでした。凡そ半年許りも事務の方の用事をして貰ふことにして、自然と其の悲哀を和らげようといふ先生の深いお考へであつたのでした。果して先生の此の計畫は効を奏しました。今の春野さんは、眞にお名前の通り、晴れやかな、輝いた、快活な「笑がほの人」であります。

春野さんが斯くも急な變り方をして、「笑がほの

人」になられたには幾つもの原因のあることでしよう。甚だ立ち入つたお話ですが、生活の安定といふことも與つて居りましよう。先生初め先生の一家の方々の行き屆いた、懇切の慰めやらお世話やらも素より大に原因をなして居りましよう。しかし春野さんは自ら常に「私は幼稚園全體の笑がほに化せられました」と言つて居ます。

森の幼稚園には別に成文の綱領と言ふ類のものは一つもありません。しかし一同が自ら遵法し、互に相警めて居りまする幾つかの不文綱領の中の一つは確に此の「笑がほ」といふことであります。前にも申した樣に先生の主張としても、又一同の理想としても「眞に笑がほの人でなくては、眞に幼兒の友にはなれぬ」といふことを始終忘れないで居ります。私は自分に感じて居る著しい一例として春野さんを擧げましたが、其の他の人達も、いづれも皆心は常に春の野の如き人々のみであります。不平といふことを聞いたことがありません。不機嫌な顏色を見たことがありません。どんな寒い日でも暑い日でも、風の日も雨の日も、どんな忙しい疲れた日でも、此の幼稚園の子どもは先生の額に八の字のよつて居るのを見ることはありません。どの先生に話しかけても無愛想な返事をされることはありません。

學力から言つても、保育の經驗から言つても、此の幼稚園の人達よりも勝れた保姆は澤山にありませう。併し、こゝ程笑がほの人の揃つておいでの處は、私は他にたんと知りません。健康の具合とか、特別な事情とかで、どうしても心の冴えくすることの出來ない樣な時は、こゝでは遠慮なく休んでいゝことに先生から言ひ渡されてあります。その代り子供に接して居る以上は、機嫌の惡い、活氣のない、いやくながらといふ樣な顏付は堅く禁物になつて居ります。